

《岐阜県知事賞》

心をつながり

本巣市立根尾学園 9年
林 宏瞭

「あった！あった！お札ありました！」

石川県にある、今にも崩れそうな家の中から、1体のお札を発見し、みんなで歓喜した。

4月末、僕は能登半島地震のあった石川に足を踏み入れた。そして、目を疑った。1月1日の地震発生後にテレビで見た光景が、まるで時間が止まったかのようにそのまま残っていた。火事で焼き尽くされた輪島朝市は、いつか見た空襲後の街の写真のようだった。地震発生から5か月経ってもこの光景。異世界のような目の前の現実には心が苦しくなった。

僕はその輪島で、2泊3日でボランティアに参加した。僕が参加したボランティアは、被災された方のどんな望みでも、そこに寄り添い思いを叶えるというものだった。例えば、「家の中から、おじいさんの形見のお札を捜し出してほしい」と言われれば、数人がかりで崩れかけの家の中から必死に1体のお札を捜した。わずか1体のお札だったが、それを見つけ出した時、被災者の方の顔は涙でぬれていた。そのお札はその被災者にとって、おじいさんとの思い出が詰まった唯一無二の宝物だったのだ。

ある被災者の方が言われた。

「復興に向けて必要なものは、お金よりも人。心をつながりだ。」と。まさにそれを実感した瞬間だった。

僕にとっては今回が初めての被災地ボランティア。不安でいっぱいだったが、みんな年齢関係なく、真剣に僕の話聞いてくれ、真剣に僕に話をしてくれた。何より14歳の僕という人間を受け入れてくれたことが嬉しかった。参加者には小学生の子供もいた。中にはなかなか学校に行けていない子もいるらしい。しかし、目の前で被災者のために力を尽くす姿を見ていると、そんなのはどうでもいいことだと思った。職業や年齢、その人の背景など関係ない。どんな人間であっても手を取り合って生きていくことが大切なのだと思えた。

東日本大震災の仮設住宅では、孤独死した人が百人を超えるそうだ。生活の困窮もあったと思うが、一言「元気ですか」「最近どうですか」という他者との会話、心をつながりがあれば、救えた命があったかもしれない。

僕はそんなことを思い岐阜へ帰ってきた。

数日後、石川の現状や石川で見た美しい自然を張り付けたポスターを持って、柳ヶ瀬のイベントで自分の思いをアウトプットした。みんな年の離れた僕の話に真剣に耳を傾け、励まし、応援してくれた。嬉しかった。思い切って飛び込んでみてよかったと思った。「心をつなぐ」ために、ファーストペンギンとなって一歩を踏み出すことが大切だと感じた。また、その数日後、企業でのイベントに防災士として参加した。子供の僕にも役割を与え、防災を通じ市民とつながる機会を設けてくださった企業の思いや取り組み、よりよいものを求めて本気でアドバイスをくださった方に心から感謝したい。「人は生きていくのではなく、生かされている。」災害が起きたときはもちろん、日常でも様々な人に支えられて、様々な人とつながって自分は生かされている、そう実感した。

だから僕は動き出す。モノづくりからのコト起こし、地域や仲間を巻き込んだ防災リテラシー。どんなコトを起こすときも、決して一人ではない。本巣市もホープ防災リーダーズを立ち上げ、僕たち若い世代の背中を押し、自治の力を高めようと奮闘してくれている。僕は濃尾大震災で被害を受けたこの根尾の地から、たくさんの人の知恵と力を借り、助け合い、みんなで防災の心を紡いでいく。小さな声も聞き逃さず、紡ぎつないでいく。そのためのキーワード・パワーワードは、「心をつながり」。そして心をつなぐのは、僕だ。